

札幌市立篠路西小学校の取組

1 研究のねらい

本校は 2008 年より、ネパールにあるコウジ・ババ・スクールの子どもたちと交流している。コウジ・ババ・スクールは、2003 年に亡くなった馬場康司さんの遺志を継いで、馬場さんの両親が 2004 年に建設した学校である。馬場康司さんは「貧しい国の子どもたちを支援したい」という強い気持ちをもっていた。馬場さんの母校が本校だった縁から、コウジ・ババ・スクールと交流が始まった。現在は馬場さんに代わり、元同僚の紙谷広樹さんがコウジ・ババ・スクールに教育支援を行っている。紙谷さんは毎年、本校の 6 年生にネパールの文化や暮らしなどの話をするために来校して下さる。これまでも、現地の子どもたちと文通をしたり、ネパールの大地震発生時には支援活動を行ったりしてきた。コウジ・ババ・スクールからも絵画などの贈り物をいただいていたが、その交流も近年はやや受け身的なものになりつつあった。

今年度は、交流とは何かを考え自分たちにできることを整理し、実行する子どもたちの姿を目指した。そのためには、ネパールの人・もの・ことに関心をもたせることが必要である。そして、「自分たちはネパールの文化に興味をもったのだから、ネパールの子どもたちも同じように日本の文化を知りたいはず。」という思いを起点に学習を進めた。交流とは相手のことを知るだけでなく、お互いに自分たちのことを理解し合うことだと気付かせたい。

2 取組内容

課題：交流の本質に気付かせるために、どのような手だてを工夫するとよいのだろうか。

(1) ネパールについて知る

出前授業で、紙谷さんからネパールの子どもたちの暮らしぶりについて映像を交えながら説明していただいた。紙谷さんの話を聞き、ネパールの子どもたちと、日本の子どもたちとは生活の仕方が異なることを知った。「ネパールでは牛が神様と考えられている。」「ネパールの子どもたちは朝 4 時に起きて、農作業の手伝いをしている。」このことを知った子どもたちは「日本と文化が全く違うんだね。」「ネパールのことをもっと知りたい。」と意見を述べていた。出前授業後に、感想や疑問に思ったことや、もっと知りたいことを書かせた。

(2) 分かったこと、知りたいことを分類する

前時で書いた子どもたちの感想を基に、クラスのみんなはどんなことに興味をもち、何を知りたいのかを類別した。そうすることで、対話の糸口を生み出すことができると考えた。「ネパールのことをたくさん知ることができたけど、これで交流は終わりかな。」と、問いかけることで、交流について考えさせた。「交流とは、一方的なものではなく、言葉や思いを往復させることである。」という考えが生まれ、日本の文化をネパールの子どもたちへ伝えたいという意欲に結び付けた。



(3) ネパールの子どもたちに伝えたいことを見付ける

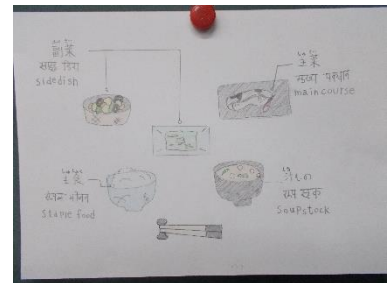
前時でまとめた「みんながもっと知りたいこと」を更に細かく分類していった。分類した後、「なぜそのことをもっと知りたいのか」という発問をした。「自分たちの生活と違い、驚いたから。」という子どもたちの意見を基に、「ネパールの子どもたちもきっと、日本の文化を知ったら驚くはず。」という考えが生まれた。日本の子どもたちがネパールの授業について関心があるのと同様に、ネパールの子どもたちも日本の授業に関心があるはずである。自分たちが知りたいことの中から、ネパールの子どもたちに伝えたいことを見付ける活動をした。

(4) 伝える方法について考える

ネパールの子どもたちに日本の文化を伝えるために、どのような方法があるかを考えさせた。「直接会って交流をする。」「手紙を送る。」などの様々な意見を「すぐできる⇔時間がかかる」「費用がかかる⇔費用がかからない」などの視点を設け、比較、分類を行った。その結果、日本のことを紹介するパンフレットを作成することになった。

(5) パンフレットを作る

パンフレットを作成する前に、どのようなパンフレットであれば、ネパールの子どもたちに日本の文化を伝えることができるのかを交流した。「日本語だけでは、ネパールの子どもたちは文字を読めないかもしれない。」「それなら、ネパール語を調べて書いてみよう。」「絵を描くと、伝わりやすいのではないかなあ。」など、問題点や悩みを交流し、解決策を考えていった。インターネットを用いてネパール語を調べたり、自分が伝えたい日本の文化を調べたりした。パンフレットを作る時に、ネパールの子どもたちに見てもらおうという意識をもち、見やすく、そして、読みやすいよう心掛けている子どもたちの姿が見られた。完成したパンフレットは、紙谷さんの手からネパールのコウジ・ババ・スクールの子どもたちの元へと届けてもらう予定である。



3 成果と課題

(1) 成果

言語だけのやりとりで理解できる子どもは、全員ではない。そのため、学級の一人一人が自分の思いをもち、他と対話できるように視覚的な整理が有効であったと考える。思いや考え、疑問などを色別に分けられた付箋紙に書き、掲示し、分析することで交流に結び付けることができた。自らの国の文化を伝えることは、自らの国の文化を深く知ることにつながり、新たな発見も生まれた。

(2) 課題

本研究では、ネパールの子どもたちと交流することを目標として活動してきたが、実際に海外の人と交流をもつことは、何かきっかけがないと難しいことである。しかし、異文化に触れたいという子どもたちの意欲を引き出すことができれば、効果的な学習が行えると考えられる。